

フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その7)

Ф. А. Федосюк

Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一
飯 島 由 大

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)、63号(2005年10月)、64号(2006年3月)、65号(2006年10月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章、4章、5章に続いて、今回は6章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。6章は17節からなるが、飯島が1～3節、鈴木が4～17節を分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は[]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第6章

官等と称号

ЧИНЫ И ЗВАНИЯ

1 節

国家公務員

Государственные служащие

〈官吏 чиновник〉とは何者か？ 1917年の革命に至るまでそう呼ばれていたのは、官等を持った、つまり厳格に定められた所定の称号を持った国家公務員である。こうしたヒエラルキーの礎を築いたのはピョートル I 世で、彼は1722年、武官、文官、宮内官という3種の官職に関わる〈官等表 Табель о рангах〉を制定したのであった。このピョートルの「官等表」は基本的に、時の流れとともに多少の変更を蒙りながらも、専制国家が転覆されるまで不動の存在であり続けた。この「官等表」に最終的なとどめを刺したのは、「全ロシア中央執行委員会 ВЦИК (Всероссийский Центральный Исполнительный Комитет)」と「ソ連人民委員会議 Совнарком (Совет Народных Комиссаров СССР)」が1917年11月11日に発布した「階級、および文官等級の廃止 Об уничтожении сословий и гражданских чинов」令である。それからまもなくして武官等級もまた廃止されている。

官職が魅力的だったのは、ある程度の自立性と個人的尊厳が確保されるからであり(特筆すべきは、官等を持っていれば、それがどんなに低い官等でも、体罰を免れることができたということである)、貧しい者にとっては「一定の等級まで до степеней известных」昇進しうる可能性があるからであり、諸々の物質的恩恵に与えられるからであり、立身出世の展望、それに(「雑階級出身者 разночинец」にとっては)貴族という名の特権階級への参入という展望が開けていたからである。

官吏の称号は、将校の称号同様、権威あるものであり、その人の確固たる社

会的地位を左右するものであった。チェーホフの滑稽な語呂合わせ——「本物の男は夫と官等からできている Настоящий мужчина состоит из мужа и чина」——を知らない人はあるまい¹。

専制国家の堅牢な支柱として国民の頭上に聳え立つ官吏のカースト制度は、いかなる共感も得られなかった。官吏に隷従する庶民は、しっぺ返しとして官吏に、とりわけ下級の官吏に、多種多様な侮蔑的な綽名を進呈した。「官庁鼠 приказная крыса」、「イラクサの種 крапивное семя」、「腹黒 чернильная душа」、「事務形式拘泥屋 канцелярский крючок」、「形式些事難癖屋 крюкотвор」、「罫線用紙 строкулист」(「行 строка」と「用紙 лист」からの造語)などである。官庁事務職員に対するピョートル I 世以前の古い呼名もまた流通していた。それは「属官 приказный」、「小役人 подьячий」、「書記官 повытчик」といった呼名だが、それらにもまた軽蔑的なニュアンスが込められていた。

グリボエードフの『智慧の悲しみ Горе от ума』に出てくるレペチーロフは、瞬く間に出世した下級官吏たちを、軽蔑を込めてこう呼んでいる——「下衆、物書き阿呆 людишки, пишущая тварь」[4幕]。官吏には「二十日人間 люди 20-го числа」という一般的で嘲笑的な定義づけもあったが、官吏の給料日が毎月20日だったことに由来するこの定義は、どちらかと言えば悪意のない響きを持っていた。

しかし、ここで指摘しないわけにはゆかないのは、何千という賄賂取りや官僚主義者、出世主義者、官品横領者の中にも、誠実に高邁な心で国民のために働こうとする官吏もまた少なからずいたということである。そうした良心的官吏のほとんどが、教育や保健、それに工学技術といった領域の関係者であった。我々が祖国の傑出した尊敬すべき活動家の中には官等を持った人々が少なくないが、官等なくしては公職の多少とも重要なポストに就くことなどできなかったからである。

¹ 「男性 мужчина」という単語が「夫 муж」と「官等 чин」という二つの単語に分解されるところに味噌がある。

それでも官吏の大多数は国民に無関心であり、敵対的であった。ロシア古典文学において官吏の肯定的人物像、とりわけ上級官吏の肯定的人物像が皆無に近いのも、だから偶然なのではない。進歩的信念を抱いた青年たちは、官職を敬遠した。チェーホフの短篇『いいなづけ Невеста』では、大学の文学部を卒業したアンドレイ・アンドレイチがこう言っている——「どうして僕は、僕がいつか額に記章をつけて、役所勤めに出ると考えただけで、こんなに不愉快になるのでしょうか？ Отчего мне так противна даже мысль о том, что я когда-нибудь нацеплю на лоб кокарду и пойду служить?」[3章]。

19世紀における下級官吏の教養レベルは、著しく低いものだった。官等を持たぬままに官職に就いた若者は、「筆耕係 писец」に割り振られた。字がうまいことは官吏として出世するための必須条件であった。ロシアにおいてタイプライターが日常的事務用品となるのは、やっと1890年代以降のことに過ぎない。かつて様々な部局やその他諸々の「官庁 присутствие」における膨大な事務文書の清書にいったいどれだけの人員、どれだけの労力が必要とされたか、想像するだけでぞっとしてしまう。さらに非の打ち所のない文書の美しさと読み易さもまた要求されたが、美しく読みやすい文書を仕上げることは驚ペンでは難しい仕事であった(鉄ペンが広く人口に膾炙したのはやっと19世紀中葉以降のことである)。それゆえ駆け出しの事務職員には初めのうち、〈驚ペン 削り чинка перьев〉が任された。これもまた一種の技術であり、誰もがうまくできるわけではなかった。

着の身着のままペテルブルクへ到着したムイシキンに対し、エパンチン將軍は真っ先に筆跡テストを行なっている。ムイシキンは申し分のない筆跡を披露するが、ガーニャ・イヴォルギンは鼻でせせら笑う。そのとき將軍は、「笑うがいいさ、笑うがね。それでもこれこそ[字のうまいことこそ]出世の糸口なんだよ Смейся, смейся, а ведь тут карьера」と述べ、ムイシキンを結構な給料で彼の筆耕として雇おうと約束するのである(ドストエフスキー『白痴 Идиот』[1編3章])。同じ「筆跡テスト экзамен на почерк」はまた、官職で出世しようとペテルブルクへ上京した地方出の青年アレクサンドル・アドゥエフ

も受けている(ゴンチャロフ『平凡物語 Обыкновенная история』[1部2章])。ヴァトカへ流されたゲルツェンの場合も事情はまったく同じであった。ヴァトカで役所勤めを強制された彼は、真っ先に筆跡鑑定を受けさせられている(『過去と思索 Былое и думы』1編14章)。

もちろんきちんとした読み書き能力も求められた。きちんとした読み書き能力がなければ、清書の際に間違いが避け難いからである。しかし読み書き能力は必ずしも出世の助けとはならなかった。オストロフスキーの戯曲『実入りのいい地位 Доходное место』では、「筆跡は素晴らしいが、正字法には暗い почерк хорош, но с правописанием плохо」無節操な出世主義者ベルグウボフの方が、教養は高いが進歩的なジャードフよりも引き立てられている[1幕3場]²。

官吏にとって清書の次の段階は、文書の作成であった。官吏の中にはこの仕事がどうしても修得できない人々もいた。

「名義顧問官 титулярный советник」まで勤め上げた47歳のマカール・デーヴシキンは、白髪になるまで「閣下 его превосходительство」のために重要書類を清書し続けているが、それは、「私には文才がなく、自分では文章を組み立てることができず、それゆえにこそ職場で成功できなかった Слогу нет, сам не составляет, поэтому-то службой не взял」からである(ドストエフスキー『貧しき人々 Бедные люди』[6月12日ワルワーラ宛])³。同じことはアカーキー・アカーキエヴィチにも起こっている。彼は、「表題を取り替え、そこか

² 1幕3場からの引用だとすれば、やや不正確。引用前半部「筆跡は素晴らしい」はユーソフの台詞であり、引用部後半「正字法には暗い」はベルグウボフ自身の台詞で、しかも正しくは「正字法については、アキム・アキムィチ、小生不心得なものでして Вот правописание-то я, Аким Акимыч, плохо-с」となっている。

³ フェドシュークの引用は不正確。ちょっと長いが原文から正確に引用しておこう——「『あの鼠官吏は清書の仕事をしているんだ』と言われますが、筆耕のどこがそんなに恥ずべきなのでしょう？ 私の仕上げた文書は正確で綺麗で、見るも快適ですから、閣下も満足くださっているのです。私は閣下のために最重要書類を清書しているのです。もっとも文才はありません。私自身、文才がないこと、あの忌々しい才能がないことぐらいちゃんと知っています。だからこそ私は職場でも成功できなかったのだし、今取り掛かっているあ

しここで動詞を1人称から3人称に取り替える *переменить заглавный титул да переменить кое-где глаголы из первого лица в третье*」ことができなかつたので、「それ以来彼は、未来永劫清書の仕事に据え置かれることになった С тех пор оставили его навсегда переписывать」のである(ゴゴリ『外套 Шинель』)。

オストロフスキーの戯曲『実入りのいい地位』では初老の官吏ユーソフが、「一人前になる *вышел в люди*」までの経緯を回想している。彼はまず、「読み書きの素養を身につけるとすぐに、普段着姿できる官庁へ連れてゆかれた *привели в присутствие в затрапезном халатишке, только что грамоте знал — читать да писать*」。彼はそこで初めは使い走りを務め、それから「[机の傍らでも]椅子でもなく、窓辺の書類の束の上に[腰掛けて]、インクではなく、古いポマードで書類書きに精を出した [*сидел-то я не у стола*] не на стуле, а у окошка на связке бумаг, писал-то не из чернильницы, а из старой помадной банки」。こうして彼は老境に達すると、賄賂のおかげで3軒の家と4頭立ての馬車を所有するまでになった、というわけである[2幕4場]。

さてここで具体的な文官の官等に焦点を絞ろう。官等表における官等の称号は、基本的に西欧諸国から、とりわけドイツの諸公国から借用したものである。しかも物々しくも発音し辛いこれらの称号は、職権のレベルも、当該の称号を与えられた官吏の職責範囲もほとんど反映していない。「登録官 *регистратор*」と言っても何も登録できず、「顧問官 *советник*」と言っても誰にも

なたへの手紙だって、愛しい人よ、何の工夫もなく率直に、胸の内にあることを書き綴っているのです…… そんなことはすべて承知しているのです。とはいっても、もしもみんなが文書を作成し始めたら、いったい誰が清書をやることになるのでしょうか? «Эта, дескать, крыса чиновник переписывает!» Да что же тут бесчестного такого? Письмо такое четкое, хорошее, приятно смотреть, и его превосходительство довольны; я для них самые важные бумаги переписываю. Ну, слогу нет, ведь я это знаю, что нет его, проклятого; вот потому-то я и службой не взял, и даже вот к вам теперь, родная моя, пишу спроста, без затей и так, как мне мысль на сердце ложится... Я это все знаю; да однако же, если бы все сочинять стали, так кто же бы стал переписывать?»。

何も助言できなかつたのである。チェーホフの手帳には次のようなメモが残されている——「君は名義『顧問官』だと言うが、いったい誰に助言しているのか？ 願わくは誰も君の助言などに耳を貸しませんように Вот ты титулярный «советник», а кому ты советуешь? Не дай Бог никому твоих советов слушать」。

官等表は14の官等に分けられていて、最下位が「14等官」、最上位が「1等官」である。

ここですぐさま留保をつけておかなければならないことがある。女性は、武官にはもちろんのこと、文官にもなれなかつたということである。したがって「女性顧問官 советница」とか「女性陪席判事 ассессорша」といった女性版の官等称号は、たんに夫の官等を指し示すものでしかなかった。それはちょうど〈女性官吏 чиновница〉が「官吏の妻」しか意味しなかつたのと同様である。

官等表に従って文官の官等一覧表を掲げておこう(次頁)。それぞれの官等には一々〈敬称 формула титулования〉、つまり口頭あるいは書面での公式的な呼称が定められていた。「敬称」は一覧表の右欄に記入されている。「敬称」は2人称(直接呼びかける場合)、あるいは3人称(本人不在で呼びかける場合か間接的に呼びかける場合)でしか使用されず、1人称で使われることは決してなかつた⁴。

⁴ 敬称については2章7節(「文化と言語」62号、2005年、82-85頁)参照。

等級 Класс	文官 Гражданский чин	敬称 Формула титулования
01	尚書 Канцлер	いと気高きお方／大閣下 Высокопревосходительство (Your Highexcellency)
02	真正枢密顧問官 Действительный тайный советник	
03	枢密顧問官 Тайный советник	気高きお方／閣下 Первосходительство (Your Excellency)
04	真正国政顧問官 Действительный статский советник	
05	国政顧問官 Статский советник	いと敬うべきお方／尊下 Высокородие (Your Highworship)
06	省顧問官 Коллежский советник	いと誉あるお方／貴下 Высокоблагородие (Your Highhonor)
07	宮廷顧問官 Надворный советник	
08	省陪席判事 Коллежский ассессор	
09	名義顧問官 Титулярный советник	誉あるお方／貴殿 Благородие (Your Honor)
10	省書記官 Коллежский секретарь	
11		
12	県書記官 Губернский секретарь	
13		
14	省登録官 Коллежский регистратор	

ロシア古典文学を読もうとするときは、この一覧表を手元においておけばいつでも何かと便利である。この一覧表は、作品に登場する官吏の社会的地位や官吏同士の相互関係を理解する手助けをしてくれるからである。

さて今度は一覧表の下から順番に、それぞれの官等について具体的に観察してゆくとしよう。

2 節

14 等官＝省登録官

Коллежный регистратор

「14 等官＝省登録官」は、1884 年まで武官の「陸軍少尉補 прапорщик」に等しい官等であった。この官等が下賜されたのは、「下層社会 низы」から国務に就いた人々であった。だからといって官吏の誰もがひっきりなしに「官等の階梯 лестница чинов」を登っていったというわけではない。生涯ずっと職務相応の官等に留まることもありえた。たとえばプーシキンの[『ベールキン物語』中の1篇]『駅長 Станционный смотритель』に出てくる駅長、サムソン・ヴィリンの場合がそうだ。彼は、この中篇のエピグラフに語られているように、「官等は14番目の省登録官、駅通宿場では独裁官 коллежский регистратор, почтовой станции диктатор」なのである。駅長は長年の間、国家公務員であるにもかかわらず、そもそも官等など持ち合わせていなかった。駅長に官等が与えられるようになったのは、彼らを権力者たちによる不断の侮辱から守るためであった。レスコフ作品の登場人物の一人は、「14 等官＝省登録官」をこう評している——「官等があれば、びんたを食らわずに済む Чин не бей меня в рыло」⁵。もっとも実際には官等もまたいつでも駅長たちをびんたから救ってくれたわけではなかった。

「14 等官＝省登録官」として勤めていたのは、諸々の事務局の筆耕、すなわちもっとも権力のない、打ちひしがれた職員であった。民衆はこの等級の複雑な称号「コレシスキー・レギストラートル(省登録官)」を、語呂合わせによって〈**エリストラチシカ елистратишка**〉(「エリストラチシカ」は「エリストラート Елистрат」という名前の卑称形、「エリストラート」は「エヴストラート Евстрат」という名前の俗語形)という蔑称に呼び変えていた⁶。茶

⁵ 作品名不詳。この言葉が使われている状況も、またこのロシア文の構造もよく分からないので、本文の前後関係から適当に訳しておいた。

⁶ 「エヴストラート」という名前に侮蔑的な意味合いがあるのか、それともたんなる語呂合

化し屋連中はこんな駄洒落を作っている——「省登録官は皇帝と紙一重 Коллежский регистратор — чуть-чуть не император」⁷。資産家の子息たちもまたもちろん、この等級から職歴を開始するのだが、彼らがこの等級に留まるのはその人生のうちのほんのひとときでしかなかった。ゴゴリがフレスタコーフに「14等官＝省登録官」という官位を与えたのは、この主人公の若さと未熟さを強調するためであり、そのことによって彼を本物の検察官と信じ込んだ地方のボスたちの無際限の愚鈍さを強調するためであった。下僕のオーシプは自分の主人のことを軽蔑するかのようこう評している——「実際にどこかの立派な御仁だってならまだしも、実はただの14等官^{エリストラチシカ}ふぜいに過ぎんじゃないか！ Добро бы было в самом деле что-нибудь путное, а то ведь елистратишка простой」[『検察官 Ревизор』 2幕1場]。

オストロフスキーの戯曲[『素敵な夢もディナーまで Праздничный сон — до обеда』]に出てくる商人の息子のバリザミーノフもまた「14等官＝省登録官」で、彼は官吏として栄達し、裕福な花嫁をもらうことを夢見ている。

公務に就き、官等を得るためには、一定の教養レベルが要求されたので、教育機関の卒業証書がない場合には、「高等小学校 уездное училище」の教育課程程度の試験にパスしなければならなかった。

チェーホフの短篇『官等試験 Экзамен на чин』では、21年間郵便局に勤めたフェンドリコフ老人が、官吏の登竜門となる試験、つまり14等官の試験を受験させられる羽目に陥っている。試験に満足に答えることができなかつたにもかかわらず、フェンドリコフは等級を与えられるのだが、彼自身は、立体幾何学を勉強したのが無駄だったことをしきりと悔やむ。立体幾何学は実はまったくの試験対象外だったのである。

わせなのかは不詳。

⁷ 「茶化し屋」の原語は «зубоскал» で、その原義は「歯を剥き出す人」。この駄洒落は「レギストラートル(登録官)」と「イムペラートル(皇帝)」の音の近似を根拠としている。

3 節

12 等官 = 県書記官

Губернский секретарь

先に引用した文官「官等表」の「13等級」は18世紀の末にはすでに使用されなくなっており、「14等官=省登録官」の次は「12等官」、すなわち「県書記官」である。これは武官の「陸軍中尉 поручик」、今日の「上級中尉 старший лейтенант」に相当した。

オストロフスキーの戯曲『養育者 Воспитательница』に登場する地主夫人ウランベークワは、息子を軍人にするのが夢で、息子が大学卒業後に下級文官となろうとしているのを嘆き悲しんでいる——「[ねえ、あんた、ちょっと考えてもみてちょうだいよ]、あの子が大学を卒業したら、あの子に坊主の子供連中に与えられるのと同じ官等が与えられるのよ！ もうとんでもないことだわ！ 軍隊では、とくに騎兵隊では、官等のどれもがみんな立派じゃないの。この頃ではもうどうやら下士官でさえ貴族出らしいわね。12等官=県書記官とか9等官=名義顧問官がいったい何だっていうの？ 9等官=名義顧問官になんて、誰でもなれるに違いないわ。商人でも、神学生でも、町民でもなれるんだわ、きっと。ただちょっと勉強して、ちょっとお勤めさえすればいいのよ [Ты представь только себе, моя милая,] когда он окончит курс, ему дадут такой же чин, какой дают приказным из поповичей! На что это пожоже? В военной службе, особенно в кавалерии, все чины благородны; даже юнкер — уж сейчас видно, что из дворян. А что такое губернский секретарь или титулярный советник? Всякий может быть титулярным советником, и купец, и семинарист, и мещанин, пожалуй. Только стоит поучиться да послужить」[2幕3場]。

ソログアップの中篇『四輪馬車 Тарантас』の主人公は退職した「12等官=県書記官」で、モスクワの悪口を言っている——「……ここでは何かにつけて、あんたの官等はと聞かれる。12等官=県書記官などと答えようものなら、誰

にも見向きもされんでしょうよ ...Здесь только что спрашивают, какой у тебя чин. Скажешь: губернский секретарь — никто на тебя и смотреть не хочет」[1章「出会い Встреча」]。

チャーホフの短篇『リベラル Либерал』の主人公で「12等官＝県書記官」のポニマーエフは、自分にも他の人々にも自分の上司に対する軽蔑心を煽り立てようとするが、そのくせ実際には上司の不興を買うのを死ぬほど恐がっているのである。

ゲルツェンの中篇『誰の罪か Кто виноват?』に登場するベリトフ、それにチャーホフの短篇『六号室 Палата №6』に出てくる、もと「執達吏 судебный пристав」のグロモフもまた、退職した「12等官＝県書記官」である。

レスコフのある短篇に登場する司祭は、「12等官＝県書記官」のことを「汚らわしい官等 чинишко паршивый」と評している[作品名不詳]。

4 節

10 等官＝省書記官

Коллежский секретарь

「11等官(＝船舶書記官 корабельный секретарь)」は瞬く間に実用から遠ざかり、「12等官＝県書記官」の次は「10等官＝省書記官」ということになってしまった。これは武官の「陸軍二等大尉 штабс-капитан」に相当する。

この「10等官＝省書記官」まで勤め上げたのはゴンチャロフの描いたオブローモフで、彼は10等官で退職している[『オブローモフ Обломов』1部5章]。ゴンチャロフの別な長篇『懸崖 Обрыв』の主人公ライスキーも、武官としても文官としても出世しておらず、「退職10等官＝省書記官」として登録されたままである。この官等、つまり「10等官」で退職するということが、官吏の出世街道を道半ばにして断念するということを意味した。

『死せる魂 Мертвые души』に出てくるコロポチカは「女性省書記官 коллежская секретарша」と呼ばれている。これはつまり、彼女が「10等官＝省

書記官」の未亡人だということである[1部3章]。

スウホヴォ・コブイリンの戯曲『クレチンスキーの結婚 Свадьба Кречинского』に登場するアフェリスト・クレチンスキーもまた、「10等官＝省書記官」として紹介されている。

この等級は高等教育機関を卒業した人々に与えられた。ここで、リツェイ卒業後のプウシキンにも、彼の他の同僚と同様に、この官等が与えられたことを思い起こしておこう。プウシキンはこの等級を皮切りに、1824年に流刑を宣告されて「公務を免職される отставлен о службы」まで、イーンゾフやラエフスキー、それにヴォロンツォーフのもとで勤務したのである。

プウシキンはヴォロンツォーフについてこう書いている——「彼は私の中に10等官＝省書記官を見ていたが、私は、正直なところ、自分を他の何者かだと考えていた Он видел во мне коллежского секретаря, а я, признаюсь, думал о себе что-то другое」[1824年7月14日付 А.И. トゥルゲーネフ宛書簡]。

レフ・トルストイの短篇『イワン・イリイチの死 Смерть Ивана Ильича』の主人公は、法律学校卒業後に「10等官」、つまり「省書記官」となり、熱心に勤務に励み、(かなりランクの高い)「3等官＝枢密顧問官 тайный советник」として死を迎えている。

それに引き替え、サルティコフ＝シチェドリンの連作『生活の些事 Мелочи жизни』に収録されている短篇『地主 Помещик』の主人公は、「学校を卒業して10等官＝省書記官となったが[(その後12年ほど外国に暮らし、ずっと農業経営を学んだ)]、現在も依然として10等官＝省書記官のままである как вышел из заведения коллежского секретарем [(лет двенадцать за границей потом прожил, все хозяйству учился)]、так и теперь коллежский секретарь」⁸。

チャーホフの諸短篇に出てくる「10等官＝省書記官」というのは大抵、運に恵まれない教養の低い人々である。たとえば短篇『人間と犬の会話 Разго-

⁸ 「地主」は『生活の些事』1章「自然と農業権謀術数の懐に抱かれて На лоне природы и сельскохозяйственных ухищрений」の3節に当たる。

вор человека с собакой』の主人公、「10等官＝省書記官」のロマンソフは、酔っては犬に生活の不満を訴えている。彼には犬以外に話し合うべき相手がいないのである。

若きチェーホフの短篇『感嘆符 Восклицательный знак』では、「10等官＝省書記官」のペレクラージンがこう言っている——「それに我々のところでは教養など少しも必要ありません。正しく書く、ただそれだけでいいのです…… Да у нас никакого образования не требуется, пиши правильно, вот и все...」。

また後年の短篇『新しい別荘 Новая дача』では、別荘が今ではどこかの官吏の手に渡っていることが語られている——「彼の帽子には記章がついていて、10等官＝省書記官でしかないのに、あたかも非常に等級の高い官吏のような話し振りや、咳の仕方をする。そして百姓たちが挨拶しても、それに応じることはない У него на фуражке кокарда, говорит и кашляет он, как очень важный чиновник, хотя состоит только в чине коллежского секретаря, и когда мужики ему кланяются, то он не отвечает」[5章]。ここには狭量にして自己満足している精勤者の正体が、ものの見事に描き出されている。

5 節

9 等官＝名義顧問官

Титулярный советник

ここで扱う「9等官＝名義顧問官」は、文学や芸術を通じてもっとも馴染みの深い官吏である。この官等は、「男は9等官＝名義顧問官で、女は將軍の娘だった Он был титулярный советник, она — генеральская дочь」と始まるヴェインベルク作詞、ダルゴムィシスキー作曲の有名なロマンスのおかげで、ほとんどの人に箸にも棒にもかからないものだと思われている⁹。將軍の娘と

⁹ ヴェインベルク (Петр Исаевич Вейнберг, 1831-1908) のこの作品は1859年、「火花 Искра」誌2号に、「タンボフのハイネ Гейне из Тамбова」というペンネームで、連作詩『心のと

の結婚が結局、この9等官の主人公の叶わぬ夢として終わるからである。ところが「9等官＝名義顧問官」は低い等級では決してなく、武官で言えば「陸軍大尉 армейский капитан」相当の等級なのである。ではいったいどうして將軍の娘は、若くて有望な大尉と結婚できないのであろうか？ それは、官等だけが社会的地位の決定要因ではなかったからである。このロマンスの主人公は明らかに、生まれも卑しく財産もない、「雑階級出身 разночинец」の叩き上げである。どんな將軍であれ、自分の娘を貴族でもない男のところへ嫁がせることなどなかったであろう。あるいはたとえ貴族であっても「一代貴族 личный дворянин」の男のところへは、すなわち子孫が貴族の身分を継承できる「世襲貴族 потомственный дворянин」ではない男のところへは嫁がせることなどなかった筈だ、ということである。

世襲貴族の権利が与えられたのは、もう一つ上の「8等官」からでしかなかった。したがって「8等官」へ上り詰める道の途上には、眼に見えない障壁が立ちふさがっており、雑階級出身の官吏がその障壁を乗り越えるのは至難の業であった。また貴族は貴族で、生まれの卑賤な人々の参入によって貴族階級が膨張するのを極度に警戒していた。「9等官＝名義顧問官」の大多数は、さらなる出世を期待せず、生涯その等級に留まるのが常だった。巷では彼らのことを「永遠の9等官＝名義顧問官 вечный титулярный советник」、あるいは嘲笑的に「名義官 титуляр」とか「肩書官 титуляшек」と呼んでいた。

ロシア文学における「名門ではない незнатный」「9等官＝名義顧問官」の

きめき Отпрыски сердца』の一つとして発表されたもの。短いので全体を引用しておこう。

男は9等官＝名義顧問官で、
女は將軍の娘だった。
男はおずおずと恋を打ち明けたが、
女は男を鼻であしらった。

Он был титулярный советник,
Она — генеральская дочь;
Он робко в любви объяснился,
Она прогнала его прочь.

9等官＝名義顧問官は立ち去り、
悲しみに一晚飲み明かした。
酔いに朦朧となった男の眼前では
將軍の娘が跳ね回っていた……

Пошел титулярный советник
И пьянствовал с горя всю ночь -
И в винном тумане носилась
Пред ним генеральная дочь...

典型像を探せば、それはゴーゴリの短編『外套』のバシマチキンであり、ドストエフスキーの『貧しき人々』のマカール・デーヴシキンであり、『罪と罰 Преступление и наказание』の退職官吏マルメラードフである。彼らは全員、貧乏で打ちのめされているばかりではなく、こぞって40歳の峠を越した人々である。

ヴァトカへ流された若きゲルツェンは官吏になっているが、大学の卒業証書のおかげで「9等官＝名義顧問官」になれたのであった。『過去と思索』の中で彼は、退職した官吏で「視力の弱い老人 подслеповатый старик」が、ゲルツェンが「9等官＝名義顧問官」になったのを知って、ひどく心を傷つけられた様子を描いている。この老人は、まだゲルツェンの生まれる前から官職に就いていたにもかかわらず、ゲルツェンと同じ官等だったのである——「これから先、白髪になるまで勤めるがいい И служи после этого до седых волос」[該当箇所不詳]。

フョードル・パーヴロヴィチの場合は話が別である。このカラマーゾフ3兄弟の父親は退職した「9等官＝名義顧問官」として余生を送っている。彼は世襲貴族として優雅に暮らせるのであり、したがって官吏として出世する必要などさらさないである。

ロシア古典文学の中で誰よりも出世のためにあくせくすることがなく、おそらくはもっとも魅力的な「9等官＝名義顧問官」と言えば、それはチェーホフの短篇『浮気な女 Попрыгунья』のヒロインであるオリガ・イワーノヴナの夫、医師のドイモフであろう。二つの病院をかけもちして働く彼は、倦むことを知らない献身的な働き者で、ロシア・インテリゲンツィアの高邁な典型とも言うべき人物である。

6 節

8 等官＝省陪席判事

Коллежский асессор

「8等級」は非常に高く評価されていて、この官等を手に入れるのは貴族ですら簡単ではなかった。この官等をもらうには原則として大学、あるいはリツェイの卒業証書が必要とされたし、さもないければ然るべき試験に合格しなければならなかった。ゴンチャロフの描くオブローモフは、次のような思索に耽っている——「9等官＝名義顧問官と8等官＝省陪席判事の間には底なし沼が横たわっていて、その沼を渡る橋の役割を果たしていたのは何らかの卒業証書であった Между титулярным советником и коллежским асессором развралась бездна, мостом через которую служил какой-то диплом」[該当箇所不詳]。

ファームウソフはおそらく、モルチャーリンがこの官等をもらえるように奔走し、いかなる労も厭わなかったのであり、そうすることによって彼に対する多大な信頼を示そうとしたのである——

生まれの卑しきお前を引き立て、家族の一員に加え、

8等官＝省陪席判事の位を与え、私の秘書に取り立ててやった。

Безродного пригрел и ввел в свое семейство,

Дал чин асессора и взял в секретари.

[『智恵の悲しみ』1幕4場]。

検察官と間違われ、得意満面のフレスタコーフは、彼の言葉に耳を傾ける地方の役人たちに恭しくこう述べる——「小生を8等官＝省陪席判事にまでしようとしてくれたのですが、小生としては、なんでまた、と思ひましてね Хотели было даже меня коллежским асессором сделать, да, думаю, зачем」[『検察官』3幕6場]。フレスタコーフはこの台詞で積年の夢を曝け出してしまっている。

つまり彼にとって「8等官＝省陪席判事」は、ほとんど理想そのものに他ならない。しかもこのとき彼は、彼の聴き手全員の位が「8等官」以上であることを失念している。例外は判事のリャープキン＝チャープキンで、彼だけが「8等官」なのである。

この官等はとりわけ貴族以外の人々には羨望の的であった。この官等は1845年まで、世襲貴族の身分が授与される権利を与えてくれたからである。

ネクラソフの抒情詩『官吏 Чиновник』の主人公は僧侶階級の出身だが、彼は――

心中深く、8等官＝省陪席判事になるという
遙かな夢を育てていた――
自分は貴族の血筋でないとしても、
自分の子供らが世間の誰かに
坊主の子だからと見下され、
非難されたくなかったがゆえ。

Питал в душе далекую надежду
В Коллежские ассесоры попасть, —
Затем, что был он крови не боярской
И не хотел, чтоб в жизни кто-нибудь
Детей его породой семинарской
Осмелился надменно попрекнуть.

[1844年、第1連]

つまりこの主人公は、官等を媒介にして世襲貴族の身分を勝ち取ろうとしているのである。

レスコフは『自伝的覚書 Автобиографическая заметка』にこう書いている――「出自から言えば私は、オリョール県の世襲貴族の家系に属しているが、貴族としての我が家系の歴史は浅く、取るに足らないものだ。貴族という身分

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その7)(鈴木淳一・飯島由大)

は私の父親が8等官＝省陪席判事となって与えられたものだからである По происхождению я принадлежу к потомственному дворянству Орловской губернии, но дворянство наше молодое и незначительное: приобретено моим отцом по чину коллежского асессора。

ゴーゴリの戯曲『結婚 Женидьба』に出てくる花婿の一人、中年の締め屋ヤイーシニツァも「8等官＝省陪席判事」である[1幕18場/ちなみに「ヤイーシニツァ」は「目玉焼き」の意]。

プウシキンはリツェイ時代に書いた作品『学友たちへ Товарищам』[1817]でこう歌っている――

僕は身体をはってまで大尉になる気はないし、

また8等官＝省陪席判事にまで這い上がろうとも思わない。

Не рвусь я грудью в капитаны

И не ползу в асессора.

ここには確かな観察眼がある。もしも武官として「陸軍大尉」の位を手にしようとすれば、しばしば「身体[正確には胸 грудь]」を弾丸の下に晒さなければならなかったし、また「8等官＝省陪席判事」になろうとすれば、多くの人々が実際、低い官等から勤め始め、じりじりとそこまで「這い上がってゆく ползти」以外に方法はなかったからである。

同じプウシキンの[未発表]エピグラム『アレクサンドル I 世に На Александра I』にはこう書かれている――

太鼓の響きを友に育った

我らが皇帝は勇ましき大尉であった。

アウステルリッツの周りを駆け巡り、

1812年には恐怖に慄きつつも、

最前線では教授であった！

だが英雄は最前線に倦み疲れ、
そして今は外事課勤務の
8等官＝省陪席判事！
Воспитанный под барабаном,
Наш царь лихим был капитаном:
Под Австерлицем он бежал,
В двенадцатом году дрожал,
Зато был фрунтовой профессор!
Но фронт герою надоел —
Теперь коллежский он ассессор
По части иностранных дел!

何たる毒舌！ 国家の第一人者である皇帝が、戦時に一介の大尉の、しかも臆病な大尉並みの働きしかできず、その代わりに「前線 фронт (=фронт)」、すなわち閲兵、パレードといった練兵の愛好者であり玄人だったと言い、さらにはこの皇帝が外務に熱中した挙句、せいぜいで「8等官＝省陪席判事」並みの真価しか発揮できなかったと言うのだから！

プッシュキンはまた『1829年の遠征時におけるエルズルウムへの旅 Путешествие в Арзрум во время похода 1829 года』にこう書いている——「若い9等官＝名義顧問官たちがここグルジアへやってくるのは、咽喉から手が出るほど欲しい8等官＝省陪席判事の位を手に入れるためである Молодые титулярные советники приезжают сюда за чином ассессорским, толико вожделенным」[2章]。これはつまり、ロシア帝国に併合されたカフカス山脈以南の地域を統治するために、皇帝政府はグルジアに急いで確固たる行政機構を設立しなければならず、若い官吏を招来する必要があったということである。そのため若い官吏には「8等官＝省陪席判事」への迅速な昇進が保証されていたのであった。

ゴーゴリの『鼻 Нос』に出てくるコワリョーフがそうした出世主義者の一

人であり、彼のようなグルジで昇進した「8等官＝省陪席判事」を世間では「カフカス8等官＝省陪席判事 кавказский коллежский ассессор」[2章]と綽名していた。コワリョーフは「自分にさらなる品位と威厳を付け加えるため、たんに省陪席判事と名乗ることは決してなく、いつでも少佐を自称するのであった чтобы еще более придать себе благородство и веса, он никогда не называл себя просто коллежским ассессором, но всегда майором」[2章]。「省陪席判事 коллежский ассессор」も「少佐 майор」も同じ「8等級」であったが、皇帝の君臨するロシア帝国では軍人偏重があからさまであり、武官の官等がいつでも文官のそれを凌駕していたのである。

7 節

7 等官＝宮廷顧問官

Надворный советник

文官の「7等官＝宮廷顧問官」は武官の「陸軍中佐 подполковник」に相当した。ゴーゴリの戯曲『結婚』の主人公、「7等官＝宮廷顧問官」のポトコリョーシンは、高らかにこう宣言している——「まったくの話、どんなことがあったって、宮廷顧問官と言えば陸軍大佐も同前で、ただ制服に肩章が足りないだけのことだからな Да, батюшка, уж как ты там себе ни переворачивай, а надворный советник тот же полковник, только разве что мундир без эполет」[1幕3場]。この鼻高々の官吏は誇張している。「7等官＝宮廷顧問官」は、「陸軍大佐」ではなく、やっと「陸軍中佐」相当だからである。素養のない「女仲人 сваха」は彼を呼ぶのに本来の「ナドヴォールヌイ・ソヴェトニク надворный советник(宮廷顧問官)」ではなく、「プリドヴォールヌイ・ソヴェトニк придворный советник(宮廷顧問官)」を使っているが[1幕8場]、こちらの称号の方が耳に心地よく、荘厳な響きを持っている。

ゴーゴリの『狂人日記 Записки сумасшедшего человека』には「7等官＝宮廷顧問官」の部長が出てくるが、そのことに関連してポプリーシチンが自慢

気にこう書き記している——「7等官＝宮廷顧問官なんて問題外だ！〈略〉まさかこの僕がどこかの雑階級の出で、仕立屋か下士官の倅だとでも言うのか？この僕は貴族なのだ。〈略〉今に見てろよ、お前！やがては僕たちだって陸軍大佐になってやるからな。〈略〉懐具合の寂しさ——それが不幸のすべてだ Велика важность надворный советник!... я разве из каких-нибудь разночинцев, из портных или унтер-офицерских детей? Я дворянин... Погоди, приятель! Будем и мы полковником... Достатков нет — вот беда」[11月6日付日記]。

ゴーゴリの『検察官』に登場する地方の郵便局長シペーキンもまた「7等官＝宮廷顧問官」である。さらにまたドゥニャ・ラスコーリニコワの婚約者で、冷淡にして打算的なルウジンも同じ「7等官＝宮廷顧問官」で、彼は「二つの職場に勤務し、一財産持っている служит в двух местах и имеет капитал」(ドストエフスキーの『罪と罰』[1部3章])。オブローモフとは対照的なライバル、シトーリツは、「官職では7等官＝宮廷顧問官以上に出世した в службе за надворного советника перевалился」のに対し[1部4章]、オブローモフはたとえば、たかだか「10等官＝省書記官」で退職してしまっている[1部5章]。

チェーホフの戯曲『三姉妹 Три сестры』ではマーシャの夫クウリイギンが、陸軍中佐のヴェルシーニンにこう自己紹介している——「クウリイギンです。当地のギムナジウムで教師をしています。7等官＝宮廷顧問官です Кулыгин, учитель здешней гимназии. Надворный советник」[1幕]。興味深いのは、官等的にはクウリイギンがヴェルシーニンと同等だということである。おそらく彼は、ヴェルシーニンが自分の妻の気を引きそうだと予感して、最初から官等が等しいということを強調しようとしたのである。現代の読者には、マーシャの夫と愛人の勤務上の身分が対等であるといったデテールなど、まったく念頭に浮かべられなくなっている。

チェーホフのもっとも短く、もっとも悲喜劇的な短篇の一つ『無常について О бренности』では、官吏のポットィキンが、絶妙な前菜の添えられたいかに

も美味そうな布林[ロシアのクレープ、あるいはパンケーキで様々なおかずを乗せて食す]を一人前ご馳走になろうと身構えながら、卒中の発作のためにぼっくり死んでしまう。ポットィキンは「7等官＝宮廷顧問官」で、人生を謳歌してしかるべきと思われた矢先、突然の死に襲われてしまったというわけである。

8 節

6 等官＝省顧問官

Коллежский советник

「6等級」はかなり上級の官等で、武官で言えば「陸軍大佐 полковник」に相当した。[『死せる魂』の]チチコフがこの「6等官＝省顧問官」だが、そのおかげで彼は地方社会に暖かく迎え入れられ、信用されるのである。チチコフは貴族の生まれで、「6等官＝省顧問官」まで昇進したがゆえに、地主でもないのにもかかわらず、農奴を所有する権利を獲得できたのである。

なりふりかまわない出世主義者で賄賂好きなタレールキンもまた、地所を持ってはいない(スホヴォ＝コブィリン『訴訟 Дело』)。それでも彼は、環境に順応することによって「6等官＝省顧問官」の位を手に入れたのであった。

トゥルゲーネフの戯曲『寄食者 Нахлебник』には32歳の「6等官＝省顧問官」、エレツキーが登場する。このペテルブルクの官吏は、「頑健で人柄も悪くないが、思いやりのない男 человек дюжий, не злой, но без сердца」である[「登場人物紹介」の頁]。

ゴンチャロフの『平凡物語』という意味深な表題を持つ中篇では、かつては心根の美しい田舎者で、素朴な理想主義者であったアレクサンドル・アドゥエフが、この世の春を謳歌する官吏、すなわち「太鼓腹をして首に勲章を下げた (с) выпуклым брюшком и орденом на шее」[エピローグ]¹⁰「6等官＝省顧問

¹⁰ 引用部は文の一部なので、引用部の入った文全体をここに挙げておこう——「彼がその太鼓腹を突き出し、首に勲章を下げた姿は威風堂々そのものだった！ С каким достоинством он носит свое выпуклое брюшко и орден на шее!」。

官」に成り果ててしまっている。

トゥルゲーネフの長篇『その前夜 Накануне』のヒロインの38歳になる婚約者、クウルナトーフスキーも「6等官=省顧問官」で、勲章を持っている。だがそれにもかかわらずヒロインのエレーナ・スターホフは、彼との結婚を拒絶し、崇高な理想の名の下にインサーロフとの困難にして危険な生活を選択するのである。

9 節

5 等官 = 国政顧問官

Статский советник

この官等はもはやほとんど将官級の位である。軍隊の階級で言えば「准将=旅団長 бригадир」に相当するが、「陸軍大佐 полковник」と「陸軍少将 генерал-майор」の中間に位置するこの等級は、1797年に廃止されている。フォンヴィージンの喜劇『旅団長 Бригадир』では「5等官=国政顧問官」が「旅団長」にこう語っている——「我々はほとんどすべての点で対等の立場にあるのです。優しき友にして花婿の父親である君、君が軍隊で果たしている仕事は、私が県行政で果たしている仕事とまったく同じものなのです Мы равны почти во всем. Ты, любезный друг и сват, точно то в военной службе, что я в статской」[1幕1場]。

『死せる魂』第2部では主人公の「6等官=省顧問官」チチコフが、結婚のこと、昇進のことにあれこれと思いを巡らせている——「たとえば5等官=国政顧問官ともなれば、尊敬措くにあたわざる実に立派な官等だ Статский советник, например, чин почтенный и уважительный」[1章]。

1845年から1856年まで、この官等に昇った官吏は、世襲貴族となる権利を要求することができた。

ゴーゴリの短篇『鼻』ではコワリョーフの顔から分離し、自立した生活を始めた鼻が、官等的には元の持主を遥かに凌駕してしまっている——「彼[鼻]は

幅広の立襟の金糸で縫い取りをした制服とスエードのズボンに身を包み、腰脇に剣をさげていた。羽飾りのついた帽子から察するに、彼は5等官＝国政顧問官のようであった Он был в мундире, шитом золотом, с большим стоячим воротником; на нем были замшевые панталоны; при боку шпага. По шляпе с плюмажем можно было заключить, что он считался в ранге статского советника」[2章]。それに引き換えコワリョーフはといえば、それより3等級も低い「8等官＝省陪席判事」なのである。

ゴンチャロフの長篇『懸崖』の登場人物の一人、アヤーノフは、「かなり上級の官等と俸給をもらっているが、何の仕事もしていない довольно крупный чин и оклад — и никакого дела」[1部1章]。それでもなおかつ彼は、「5等官＝国政顧問官から4等官＝真正国政顧問官への из статских в действительные статские」昇進を期待しているのである[同上]。

オストロフスキーの喜劇『猿も木から落ちる На всякого мудреца довольно простоты』の登場人物一覧には、「大物地主 важный барин」ママーエフと記載されているが¹¹、彼自身はこう名乗っている——「私は5等官＝国政顧問官です я статский советник」[1幕4場]。

ロシア古典文学は読者に「5等官＝国政顧問官」の一大ギャラリーを提供してくれる。だが特筆すべきは、この高い官等がそれを得た人々に幸福も威厳も与えてはいないということである。そうした人物として挙げられるのは、オストロフスキーの戯曲『額に汗したパン Трудовой хлеб』に出てくる、巨大な富を築いた官吏のポトロホーフであり、トゥルゲーネフの長篇『貴族の巢 Дворянское гнездо』に出てくる僧侶階級出身のゲデオノフスキーであり、チャーホフの戯曲『かもめ Чайка』に出てくる裁判所職員のソーリンであり、チャーホフの短篇『発見 Открытие』に出てくる技師のバフローミンである。さらにまた、チャーホフの笑劇『不本意な悲劇役者 Трагик поневоле』に登場する、疲れ切った「別荘亭主 вечный муж」[平日は町で働いて、土日だけ別荘の家

¹¹「大物地主 важный барин」は「裕福な地主 богатый барин」の間違いだと思われる。

族のもとへ帰る夫のこと]のトルカチョーフは、哀れそのものといった容貌を呈している。

10 節

4 等官＝真正国政顧問官

Действительный статский советник

「4 等官＝真正国政顧問官」は武官の「陸軍少将 генерал-майор」に相当したが、「4 等級」以上の 4 つの官等は〈文官將軍 штатский/статский генерал〉と呼ばれることがしばしばであった。「4 等官＝真正国政顧問官」以上の 4 つの官等を持つ人々は群を抜いた特権階級で、彼らは国の重要ポストを占めていた。彼らはときとして、公式的には存在しない称号ながら、〈高官 сановник〉と呼ばれることもあった。

レフ・トルストイの『幼年時代 Детство』には次のような一節がある——「イーヴィン家もまた裕福で、父親はどこかの文官將軍であった Ивины тоже были богаты, и отец их был какой-то штатский генерал」¹²。不運なチェルヴァコーフが劇場でくしゃみをして、その禿頭に唾を吐きかけてしまった重要人物は、「文官將軍」と呼ばれている(チャーホフ『ある官吏の死 Смерть чиновника』)。

「文官將軍」の最低の等級、つまり「4 等級」からしてすでに、1856 年以来世襲貴族の権利が与えられた。ロシア帝国において「文官將軍」、ならびにそれに匹敵する「高官」が貴族でないことはありえなかった。

オストロフスキーの喜劇『裕福な花嫁たち Багатые невесты』では登場人

¹² 引用文の出典はフェドシュークの記憶違いと思われる。これは『幼年時代』ではなく、『青年時代 Юность』の 17 章「挨拶回りの支度 Я собираюсь делать визиты」の一節である。ちなみに、意味上の差異はほとんどないが、引用文もやや不正確。正確にはこうである——「イーヴィン家もまた裕福で、父親はどこかのお偉い文官將軍であった Ивины тоже были богачи, и отец их был какой-то важный штатский генерал」。

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その7)(鈴木淳一・飯島由大)

物たちが退職した「4等官＝真正国政顧問官」のグネヴィシヨーフを、その面前では恭しく「将軍」と呼んでいる。

ゴンチャロフの『平凡物語』ではシニカルで打算的なピョートル・アドゥエフが、小説の掉尾で「4等官＝真正国政顧問官」なろうとしており、甥のアレクサンドルは敬意を込めて彼に「気高きお方／閣下. ваше превосходительство」と呼び掛けなくてはならなくなっている[2部6章末尾のピョートル宛書簡の冒頭]。

レフ・トルストイの戯曲『生ける屍 Живой труп』のヴィクトル・カレーニンもまた同じく、この「4等官＝真正国政顧問官」である。

チャーホフの短篇『一等席の客 Пассажир первого класса』に登場する才能豊かな架橋工事技師のクリクゥノフが、その数々の功績と4等官という官等にもかかわらず、誰も彼のことを知らないばかりか、彼の名前を耳にしたことすらなく、あまつさえ彼の建てた橋の開通式のときに全員の注目をさらったのが有名な歌手だったことを嘆くのは、だから当然至極のことなのである。

11 節

3等官＝枢密顧問官

Тайный советник

チャーホフがまだアントーシャ・チェホンテと署名していた頃のユーモア小品ではプラヴドリューボフ某が、公金横領した「枢密顧問官」のポンチ絵を描いた風刺画家、ウプリャーモフにこう言っている——「いったいあなたは、慈悲深きお方、枢密顧問官というのが武官で言えば陸軍中將に相当するということをご存知なのですか？ Да знаете ли вы, милостисдарь, что тайный советник соответствует в армии генерал-лейтенанту?」[作品名不詳]。そう、「枢密顧問官」というのは上から3番目の官等、つまり「3等官」なのである。

トゥルゲーネフの長篇『処女地 Новь』では重要な高官、反動家のシピャーギンが、「3等官＝枢密顧問官」の肩書を持っている[1部3章]。

レフ・トルストイの短篇『イワン・イリイチの死』の主人公は空虚な、誰にも必要とされない人生を送りながら、「3等官＝枢密顧問官」という高い官等で死を迎えている。

とはいえ、国務に携わるということになれば、しかるべき立派な人物が「3等官＝枢密顧問官」となる場合もしばしばあった。著名な医学者にして大学教授である、チェーホフの傑作短篇『退屈な話 Скучная история』の主人公——彼はこうした「3等官＝枢密顧問官」の一人である。

チェーホフはまた『三等官／枢密顧問官 Тайный советник』という表題の短篇も書いている。主題は期待と現実の不一致である。そこでの落ちは、子供たちが期待に胸膨らませ、じりじりしながら待っている、重要な高官であるはずの叔父が、実は哀れで惨めな老人に過ぎなかった、という具合になっている。

チェーホフの有名な短篇『でぶとやせ Толстый и тонкий』は、竹馬の友二人が駅で偶然に出会う話である。「8等官＝省陪席判事」になった痩せた男は、太った男が「すでに枢密顧問官にまで昇進している」こと、つまり自分を5等級も追い抜いて「3等官」にまでなっていることを知る。そう知るや痩せた男は瞬時に口調を変え、幼少時の学友に対してへつらい、ぺこぺこし始める。「官等表」とは、正常な人間関係をかくも激しく歪めてしまう存在だったのである。

12 節

2等官＝真正枢密顧問官と1等官＝尚書

Действительный тайный советник и канцлер

「真正枢密顧問官」と「尚書」は官等表の最上位、すなわち「2等級」と「1等級」である。ロシアの「真正枢密顧問官」は数が少なく、指折り数えられるぐらいであり、「尚書」にいたっては史上たったの11人、しかもそれぞれの歴史時代区分に一人ずつしかいない。したがって芸術作品にはどちらも反映

されておらず、読者にはそのモデルを探しようがない。例外は歴史小説で、そこには最上位の高官たちが実在の人物として実名で直接的に導入されている。

「2等官＝真正枢密顧問官」は武官の「陸軍大将 полный генерал」(「騎兵大将 полный генерал от кавалерии」、**「歩兵大将 полный генерал от инфантерии」**)に、「1等官＝尚書」は「元帥 генерал-фельдмаршал」にそれぞれ相当した。

ロシア古典文学の世界で「尚書」という言葉に出会うのは、ただ一般的な転義で使用された場合でしかない。たとえばグリボエードフの『智恵の悲しみ』のファームウソフは、モスクワの老齢の貴頭たちについてこう褒め称えている——「頭脳明晰なことと言ったら、彼らはまさに退職した尚書そのものですな Прямые канцлеры в отставке — по уму」[2幕5場]。またクップリンの短篇『皇帝の書記 Царский писарь』では老いた書記のガヴリューシカが、「庶務監督官 экзекутор」に向かって嘲笑的にこう言っている——「ニコライ・コンスタンチーノヴィチ、あなたのその天才的な頭脳を持ってすれば、国家の尚書にもおなりになれるでしょう По вашему гениальному уму, Николай Константинович, вам бы государственным канцлером быть」[3章]。

13 節

15 等官

Чиновники XV класса

オストロフスキーの喜劇『辛い日々 Тяжелые дни』では若いプレーボーイのドスウージェフは商人のブルウスコーフに、**〈県登録官 губернский регистратор〉**だと自己紹介している。そうした官等のことなど耳にしたことのないブルウスコーフはこう尋ねる——「それはいったいぜんたい何ですか？ Это что ж какое?」。それに対してドスウージェフは厚かましくもこう説明する——「それは15等官のことで、ロシアにはたった2人しかおりません 15-го класса, нас в России только двое」。するとブルウスコーフは、無知を曝け出

したくないばかりに、この破廉恥青年にこう言っている——「まあ、おかけなさい。よくぞおいでくださった Ну, садись, гостем будешь」[3幕7場]。

官等表には「15等官」も「県登録官」も存在しないことはもはや周知の事実だとしても、現代の読者の大多数にとってこうした言葉の行き交う状況の醸し出すユーモアを感じ取るのは至難の技である。

ゴンチャロフの長篇『懸崖』では地方に流刑処分された学生、マルク・ヴォーロホフが、ライスキーにこう自己紹介している——「自己紹介させていただきます。マルク・ヴォーロホフと申します。警察の監視下におかれた15等官で、当市の自由なき市民です Честь имею рекомендоваться: Марк Волохов, пятнадцатого класса, состоящий под надзором полиции чиновник, невольный здешнего города гражданин」[2部14章]。

アイロニカルな「15等官」という言葉から明らかなのは、流刑中のヴォーロホフにはいかなる官等もないということである。

14 節

チェーホフの「官等表」

Чеховская «Табель о рангах»

1886年、雑誌「破片 Осколки」に、若きアントン・チェーホフの作成したユーモラスな「官等表」が掲載された。駆け出しの作家チェーホフはそこで、同時代の文学者たちのランク付けをしている(ここではもっとも有名な作家名だけを列挙することにする)——

*〈真正枢密顧問官(2等官) Действительные тайные советники〉

= (空席)

*〈枢密顧問官(3等官) Тайные советники〉

= レフ・トルストイ、ゴンチャロフ

*〈真正国政顧問官(4等官) Действительные статские советники〉

= サルトイコフ=シチェドリン、グリゴローヴィチ

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その7)(鈴木淳一・飯島由大)

*〈国政顧問官(5等官)Статские советники〉

=オストロフスキー、レスコフ、ポロンスキー

*〈省顧問官(6等官)Коллежские советники〉

=マイコフ、ガルシン、グレープ・ウスペンスキー、プレシチェーフ

*〈宮廷顧問官(7等官)Надворные советники〉

=コロレンコ、ボボルィキン、ナトソン

*〈省陪席判事(8等官)Коллежские ассесоры〉

=ミナーエフ、ヴェインベルク、その他今日では忘却された諸々の作家

*〈名義顧問官(9等官)Титулярные советники〉

=ズラトヴラツィー、その他

*〈省書記官(10等官)Коллежские секретари〉

=アプッフチン、コンスタンチン・スルウチェーフスキー、その他

「県書記官(12等官)губернские секретари」と「省登録官(14等官)коллежские секретари」として列挙されている文学者たちの中には、現代の読者の記憶に残っているような名前を見出すことはできない。「官等表」の末尾には、「官等なし=オクレイツ не имеющий: Окрейц」と記されている。オクレイツは才能のない反動的な、誰からも軽蔑されていた文学者である¹³。

¹³ チェーホフの『文学官等表 Литературная табель о рангах』は1886年、「破片」19号に、「脾臓のない人間 человек без селезенки」という筆名で発表された。参考のために「3等官」以下すべての作家名をロシア語のまま挙げておこう(下線が施されているのはフェドシュークが取り上げた作家)。「3等官」=Лев Толстой, Гончаров／「4等官」=Салтыков-Щедрин, Григорович／「5等官」=Островский, Лесков, Полонский／「6等官」=Майков, Суворин, Гаршин, Буренин, Сергей Максимов, Глеб Успенский, Катков, Пыпин, Плещев／「7等官」=Короленко, Скабичевский, Аверкиев, Боборькин, Горбунов, гр. Салиас, Данилевский, Муравлин, Василевский, Надсон, Н. Михайловский／「8等官」=Минаев, Мордовцев, Авсеенко, Незлобин, А. Михайлов, Пальмин, Трефолев, Петр Вейнберг, Салов／「9等官」=Альбов, Баранцевич, Михневич, Златовратский, Шпажинский, Сергей Атава, Чуйко, Мещерский, Иванов-Классик, Вас. Немирович-Данченко／「10等官」=Фруг, Апухтин, Вс. Соловьев, В. Крылов, Юрьев, Голенищев-Кутузов, Эртель, К. Случевский／「12等官」=Нотович, Максим Белинский, Невежин, Каразин, Венгеров, Нефедов／「14等官」=Минский, Трофимов, Ф. Берг, Мясницкий, Линев, Засодимский, Бажин。

15 節

宮廷の官等と称号

Придворные чины и звания

ロシアでは特別な宮廷官等(あるいは宮廷称号)を持っている人は数少なく、そのため文学の世界で彼らに出会うことは滅多にない。ここでは頻度がもっとも高く、記憶に残る宮廷官等(称号)を取り上げることにしよう。

〈侍従補 камер-юнкер〉という称号が人口に膾炙しているは専ら、ニコライ I 世がこの称号をプウシキンに「下賜した пожаловал」からに他ならない。詩人はこの恩恵にひどく心を傷つけられたが、それは「侍従補」の義務が彼を宮廷にがっちり縛りつけるものであることを理解していたからである。しかも宮廷ヒエラルキーの最下等に位置する「侍従補」という称号を授けられるのは通常宮廷内の青年だったのに対し、一方プウシキンはたとえば、そのときすでに 33 歳だったのである……

自分の偉大な天職を感じ取っていた詩人にとって、そもそもいかなる官等も称号も関心の外にあった。しかしだからといって、「侍従補」という称号(1804 年までは官等)が取るに足らない、どうでもよいものであったと結論づけるべきではない。真相はその正反対であった。

そのことを了解するには、かつて「官等表」においては「侍従補」という宮廷称号は「国政顧問官」、すなわち「文官将軍」と呼ばれる等級一步手前の「5 等官」に匹敵したという事実を考慮するだけで十分であろう。皇帝から直々に下賜されるこの称号は原則的に、官吏の階段の迅速な昇進を貴族に保証するものだったのである。

ドストエフスキーの『白痴』の零落貴族ムィシキン、それにゴンチャロフの『懸崖』の地主ライスキーが、この「侍従補」という魅力的な称号を周囲の人々から囑望されている。トゥルゲーネフの『処女地』の前途洋々たる 32 歳、カロメイツェフは、「モスクワの宮内省に勤務し、侍従補の称号を持っていた служил в Москве в Министерстве двора и имел звание камер-юнкера」[1 部

5章]。ゴーゴリの『狂人日記』ではポプリーシチンの上司で、ポプリーシチンが恋する娘の父親に当たる高官が、「必ずやソフィーを將軍か、はたまた侍従補か、はたまた陸軍大佐のもとへ嫁がせたがっている хочет непременно видеть Софи или за генералом, или за камер-юнкером, или за военным полковником」[11月13日付日記]。しがない官吏は子犬の手紙からこのことを知り¹⁴、憤りを爆発させるのである——「この世で最高のものはすべて、すべて侍従補か將軍の手に入ってしまうのだ Все, что есть лучшего на свете, все достается камер-юнкерам или генералам」[同上]。トゥルゲーネフの『貴族の巢』に出てくるパンシンは、「まだやっと28になったばかりだが、もはや侍従補で、かなり上級の官等を持っていた всего пошел 28-й год, а он был уже камер-юнкером и чин имел весьма изрядный」[4章]。

未婚の6人娘を持つ公爵夫人トゥゴウホーフスカヤは、独身のチャーツキーが「侍従補」でもなければ、裕福でもないこと知ったとき、彼を自宅の夜会へ招待するのをすぐさまとりやめ、彼を迎えにいかせるつもりだった夫を呼び返そうとする——「公爵、公爵！ お戻りになって！ Князь, князь! Назад!」[『知恵の悲しみ』3幕7場]。

トルストイの『戦争と平和 Война и мир』1巻3部の冒頭では、1805年にピエール・ベズウホフが「その頃5等官＝国政顧問官と同格だった что тогда равнялось чину статского советника」「侍従補」となり、外交官として採用されたことを知ることができる[1章]。

19世紀も末に近づくと、「侍従補」という称号はますます名誉称号、つまり一種の報奨といった色合いの濃いものへと変質していった。

トルストイは『復活 Воскресение』でセレーニンについて、情容赦のない嘲笑を込めてこう書いている——「彼は周囲の奔走のおかげでやっと侍従補に任命されたので、刺繍した制服を着、白いリンネルの胸当てをつけ、四輪馬車に

¹⁴「子犬の手紙」とは、上司宅で飼われているメジという子犬がフェデリという子犬へ宛てた手紙のことで、主人公はそれをフェデリの寝所から盗み、自宅で読んでいるのである。

乗って様々な人々のところへ、召使の職に任官させてくれたお礼参りにでかけなくてはならなかった *выхлопотали* назначение камер-юнкером, и он должен был ехать в шитом мундире, в белом полотняном фартуке, в карете благодарить разных людей за то, что его произвели в должность лакея」[2部23章]。

「侍従補」の1ランク上には、〈侍従 *камергер*〉という称号(1809年までは官等)があった。18世紀には「侍従」は非常に評価の高い官等であった。ファームウソフは貴顕クウジマー・ペトローヴィチのことを次のように評している——「故人は実に立派な侍従でした／自ら金の鍵を持っていたばかりか、その鍵を子息へ手渡すことできた／〈略〉／モスクワでは何と多くの大物が暮らし、そしてこの世を去ってゆくことか！ *Покойник был почтенный камергер, / С ключом и сыну ключ умел доставить... / Что за тузы в Москве живут и умирают!*」[『知恵の悲しみ』2幕1場]。

「侍従」と即座に見分ける目印は、[皇帝の個室へ出入りできる]青いリボンのついた金の鍵で、その鍵は制服の左裾にとめられていた。

ここで注意しておかなければならないのは、宮廷称号がいつでも決まって文官、あるいは武官の官等を帳消しにするものではなく、両立し得たということである。トゥルゲーネフの『処女地』に登場するシピャーギンは、「侍従」であると同時に「3等官＝枢密顧問官」として紹介されている[1部3章で「3等官＝枢密顧問官」として、4章で「侍従」として描かれている]。

19世紀が始まると「侍従」という称号はもはや、宮廷における特定の義務の遂行とは結びつかないものになってしまう。トルストイの『戦争と平和』ではピエール・ベズウホフが1811年に「侍従」に任官している。そしてこの長篇の2巻5部になると読者は、ピエールがすでに「モスクワで悠悠自適の余生を送る退職侍従 *отставным, добродушно доживающим свой век в Москве камергером*」であることを知らされる[1章]。

『戦争と平和』ではアンドレイ・ボルコンスキーもまた「侍従」の称号を持っている。『アンナ・カレーニナ *Анна Каренина*』ではスチーフ・オブロン

スキーが「侍従」に任命されているが、彼はお礼参りにわざわざペテルブルクまで出かけている[7部17章]。

19世紀初頭、「侍従」は文官の「4等官=真正国政顧問官」、すなわち武官の「少将 генерал-майор」に相当した。

「侍従」の1ランク上の官等に、〈調馬官 шталмейстер〉と〈狩猟官 егермейстер〉があった。ともに[文官の「3等官=枢密顧問官」、武官の]「中将 генерал-лейтенант」に相当した。『アンナ・カレーニナ』のヴロンスキー伯爵は、「近衛隊大佐 гвардейский полковник」でありながら、これら二つの官等も同時に所有している[1部12章、4部1章その他]。

宮廷官等の最高位は〈侍従長 обер-камергер〉、〈執事長 обер-гофmeister〉、〈主馬首 обер-гофмаршал〉等々であった。これらはすべて「2等級」で、宮廷官等に「1等級」はなかった。トルストイは『戦争と平和』の中に、アレクサンドルI世時代に「主馬首」を務めた遠戚のトルストイ伯爵を登場させている。

ロシア古典の歴史小説ではさらに〈扈従 камер-фурьер〉とか〈近習 гоф-фурьер〉といった称号に出会うかもしれない。たとえばプウシキンの『コロムナの家 Домик в Коломне』を読めば、パラシヤの従姉妹で「近習の妻のヴェーラ・イワーノヴナ Вера Ивановна, супруга гоф-фурьера」が「宮廷で暮らしていた при дворе жила」ことが分かる[26連]。しかしながらこれら二つは宮廷官等ではなく、「皇帝直属の при высочайшем дворе」官等だとみなされていた。「扈従」や「近習」は宮廷に勤務する人々を差配していたが、ランク的には「侍従補」よりもずっと下であった。

女性は官等を持つことができなかったが、宮廷内のヒエラルキーには女性のための称号が存在していた。〈女官 фрейлина〉(ドイツ語の「令嬢 Fraulein(=フレイレイン=барышня)」に由来)は、帝室に属する女性要人にその随員として仕えた。「女官」は「官等表」に記載されてはいないものの、文官の「4等官=真正国政顧問官」、すなわち武官の「少将」に相当する官等であった。

『戦争と平和』はアンナ・パーヴロヴナ・シェーレル家での夜会の描写から

始まるが、彼女はかつて皇后マリヤ・フョードロヴナ(パーヴェル I 世の未亡人)に「女官」として仕えている[1巻1部1章]。プウシキンの『スペードの女王 Пиковая дама』に登場する高齢甚だしい伯爵夫人は、かつて「女官」に任命されたときのことを回想している[2章]。「女官」は結婚と同時にその称号を失うのが常であったが、ときにはそのまま宮中に残り、さらに上級の〈**主席女官 статс-дама**〉という称号を与えられることもないではなかった。

専制政府の徹底的な反対者となったレフ・トルストイにとって宮廷称号は憎悪の対象であった。このことを雄弁に物語ってくれるのは、未完の長篇『デカブリスト Декабристы』中に書き込まれたほんの些細な、とはいえ注目すべきデテールである。そこで話題になっているのは、某イワン公爵のことである。この公爵は、「現在はオベル・ゴフ・カフェルメイステル(彼は何かそんな類の役職を挙げた)で、かつては大臣も務めた который теперь обер-гоф-кафермейстер (он назвал что-то в этом роде) и был министром」人物とされている。しかし「オベル・ゴフ・カフェルメイステル」などという称号が存在したためしはなく、トルストイは架空の官等をでっち上げることによってもの見事に、宮廷官等の重苦しいドイツ式名称を風刺するとともに、皇帝の玉座を取り巻く反動側近に対する自らの嫌悪を表明し得ているのである。

16 節

過った敬称

Неправильное титулование

ロシア古典文学の世界では過った敬称に出会うことも稀ではない。その原因は二つ考えられる。一つは対談者に対するへつらい、対談者を喜ばせようという欲求であり、もう一つはたんなる無知である。まずは最初の原因から始めるとしよう。

チチコフは、地方役人の歓心を買おうとして、「副知事や議会の議長を——彼らは5等官＝国政顧問官に過ぎなかったが——過って『閣下(気高きお方)』

とすら呼んだ вице-губернатору и председателю палаты — они были только статскими советниками — сказал даже ошибочно «ваше превосходительство»」[『死せる魂』1部1章]。これはつまり、副知事や議長は「文官將軍 штатские генералы」などではまったくなく、「尊下(いと敬うべきお方)ваше высококорodie」と呼ばれてしかるべきなのだが、チチコフは「過って ошибочно」彼らを「文官將軍 штатский генерал」とみなそうとしたということに他ならない。

フレスタコフを検察官と勘違いした「市長 городничий」もまた「万一に備えて на всякий случай」、フレスタコフを「將軍 генерал」相当とみなし、彼に「閣下(気高きお方)」と呼び掛けている[3幕6場]。下僕のオーシプも自分たちにとって都合のいいこの過ちを支持し、主人であるフレスタコフに「貴下(いと誉あるお方)высокоблагородие」という敬称を使っている[3幕10場]。これは「閣下」よりも下級な敬称であるが、それでもフレスタコフにとっては水増しされた敬称である。彼は「14等官=省登録官」であり、「貴殿(誉あるお方)благородие」と呼ばれるのがせいぜいだからである。ちなみにここでは「市長」自身の地位にも——すなわち「大区警察署長 частный пристав」が「市長」に「貴下」と呼び掛けていることから明らかなように[5幕7場]、「市長」自身は「6等官」から「8等官」のいずれか(つまり「陸軍少佐 майор」か「陸軍中佐 подполковник」、あるいは「陸軍大佐 полковник」)であるという点にも——注意を払っておこう。こうした点に注意を払うことは、この喜劇における「力の配置 расстановка сил」を把握するために不可欠である。「市長」の官等あるいは役職がテキスト中に明示されていないとあれば、それはなおさらのことである。

チャーホフの『三姉妹』では「地方自治庁 земская управа」のメンバーであるアンドレイ・プロゾロフが、守衛フェラポントに「貴下(いと誉あるお方)ваше высокоблагородие」ではなく、「アンドレイ・セルゲーエヴィチ」と呼び掛けられると、頭から湯気を出して怒る。するとフェラポントは彼に「尊下(いと敬うべきお方)высокорodie」と呼び掛けている[3幕]。大抵の人は、こ

れはフェラポントがプロゾロフの官等を低く見積もっているか、混同しているのだと思ってしまう。だが実際はそうではない。フェラポントは実は、おそらくは非難を避けようとして、プロゾロフの官等を1等級分そっくりそのまま底上げしているのである。「尊下」は「貴下」よりも上位の官等に対する敬称なのだから。

しかしながら、敬称の詳細に暗い下々の勤務者は、見知らぬ高官に対しては誰にも等しく「貴殿(誉あるお方)ваше благородие」、「貴下(いと誉あるお方)ваше высокоблагородие」、あるいは「尊下(いと敬うべきお方)ваше высококородие」と呼び掛けた。頻度の一番高かったのは「尊下」であった。それでも敬称の取り違えは頻発した。トゥルゲーネフの短篇『古い肖像画 Старые портреты』では御者が乗客に「貴殿」と呼び掛けると、「3等官=枢密顧問官」の乗客は御者にこう釘を刺している——「……いいかね、私は閣下であって貴殿ではない ……знай, что я превосходительство, а не благородие」¹⁵。

官等は低いが功名心の強い官吏は、自分の官等以上の敬称で呼ばれたがった。チャーホフの短篇『すぐり Крыжовник』の主人公、退職した官吏のチムシャ=ギマラーイスキーは地主になると、「貴下」と呼ばれる官等まで勤め上げたとはとても思えないのに、それでも「百姓たちが彼に貴下という敬称を使わないと、非常に立腹するのであった очень обижался, когда мужики не называл его ваше высокоблагородие」。

チャーホフの短篇『決闘 Дуэль』に登場する武官サモイレンコは、「尊下 высококородие」と呼ばれるべき「5等官=国政顧問官に過ぎなかったにもかかわらず、准医師や兵士たちに『閣下』と呼ばれるのが好きだった любил, чтобы фельдшера и солдаты называли его «вашим превосходительством», хотя был только статским советником」[1章]。

¹⁵ 引用が若干不正確だと思われる。最新30巻全集の10巻によれば、御者の問は同じだが、乗客は「私は閣下であって、貴下ではない я превосходительство, а не высокоблагородие」と答えている。『古い肖像画』は、『自他の回想断章 Отрывки из воспоминаний — своих и чужих』と題された、2つの短篇からなる作品の一部。

ロシア古典文学では、ごく稀にだが、アイロニカルな性格を帯びた「水増しされた敬称 *завышенное титулование*」というのに出会うことがある。たとえばドストエフスキーの『罪と罰』には、麦粉売場の傍らに立っている赤いシャツを着た生意気な青年がラスコーリニコフに「輝かしいお方 *ваше сиятельство*」と呼び掛ける場面がある[2部6章]。この敬称が使われるのは公爵、あるいは伯爵に対してだが、この青年が貧相ななりをした学生ラスコーリニコフを公爵、あるいは伯爵と取り違えることなどあり得ない。この敬称にはすぐそれと分かる愚弄、すなわち現代の読者にはほとんど看取不可能だが、小説の主人公ラスコーリニコフの屈辱的な社会的地位を際立たせようとする愚弄が込められているのである。

でっち上げられた嘲笑的な敬称というのも、こうした現象に近い。オストロフスキーの『罪なき罪人 *Без вины виноватые*』では、夫の官等を尋ねられたシェラーヴィナが、せせら笑いながらこう答えている——「栄えある無一文、これがあの人の官等のすべてです *Ваше высококоничего, вот и весь его чин*」[1幕3場]。チャーホフの有名な短篇[『モスクワのトルuppナヤ広場にて *В Москве на Трубной площади*』]ではモスクワのトルuppナヤ広場で鳩好きたちが、ギムナジウムの教師をからかって「代名詞様 *Ваше местоимение*」と呼んでいる。

17 節

学術界における等級と称号

Степени и звания в науке

学術界における等級と称号は今日のものとは多くの点で相似しているが、誤解を招来しかねない相違がないでもない。大学の全過程を優秀な成績で終えた学生は、「大学院 *аспирантура*」を修了せず、「学位論文公開審査 *защита диссертации*」を経なくとも〈**修士 кандидат**〉となることができた。学位には学術分野、あるいは「修士」がそのまま残って働く大学の名前が付加された。たとえば「法学修士 кандидат прав」、「モスクワ大学修士 кандидат *Московского*

университета」といった具合である。平凡な成績の卒業生は、〈真正大学生 действительный студент〉という称号に甘んじなければならなかった。たとえばトゥルゲーネフの『父と子』のニコライ・ペトローヴィチ・キルサーノフは、息子のアルカーヂー同様、「修士」として大学を卒業している[1章]。一方『貴族の巢』のパンシンは、キルサーノフ父子とは違って、「真正大学生」の称号を得て大学を卒業している[4章]。レフ・トルストイの『生ける屍』の主人公フェーヂャ・プロタソフ、それに『クロイツェル・ソナタ』の主人公コズヌィシエフもまた、「修士」の学位を持っている。

ロシア帝国においてそもそもは下から2番目の、1884年以降は最下位の学位だったのは、〈学士 магистр〉であった。これはほぼ現代の「修士 кандидат наук」に相当する。「学士」の学位を得るためには「学士論文 магистерская диссертация」の公開審査に合格しなければならなかった。チェーホフの短篇『黒衣の修道士 Черный монах』に出てくる若い学者のコヴリンが「学士」であるが、彼は自前の講座すら受け持っている。

1884年、「修士」と「真正大学生」の学位は廃止された。

かつても今日同様、最高の学位は〈博士 доктор〉であった。チェルヌィシェフスキーの長篇『何をなすべきか』の主人公ロプーホフとキルサーノフは、大学を卒業するとすぐさま「医学博士 доктор медицины」の学位試験を受けようと決意している[2章2節]。そしてそのうちの一人は見事に目的を達している——「キルサーノフに博士号が授与され、その約1年半後には講座が与えられた Дали Кирсанову докторство, дали года через полтора кафедру」[3章10節]。

チェーホフの短篇『退屈な話』には「若い学問の神官 молодой жрец науки」が登場するが、この短篇の主人である教授は彼についてこう述べている——「彼は今年博士課程の試験に合格し、今はただ論文を執筆するだけだ в этом году он выдержал экзамен на докторанта и что ему остается теперь только написать диссертация」。そしてこの教授はこんな思案を巡らせている——博士課程に在籍するこの青年はきっと「誰にも必要とされない論文を」執筆し、

「退屈な公開論文審査に堂々と合格し、彼には不要な学位を授与されるだろう никому не нужную диссертацию, с достоинством выдержит скучный диспут и получит ненужную ему ученую степень」[2章]。〈博士課程在籍者 докторант〉とは、博士論文の公開審査を受けるために準備を進めている人々のことである。

学術関係の称号で我々現代人に理解できないのは、革命後に廃止された〈非常勤助教授 приват-доцент〉という称号である。通常の「助教授」と「非常勤助教授」の相違は、前者が常勤の大学教員であったのに対し、後者が非常勤の大学教員であったという点である。

かつて〈アカデミшян академик〉と呼ばれていたのは、何らかの「アカデミー академия」のメンバー、すなわち何らかの学術機関のメンバーだけではなかった。たとえば「軍事アカデミー военная академия」、「神学アカデミー духовная академия」といった、「アカデミー」を名称の一部とする大学の在學生(あるいは卒業生)もまた、「アカデミшян」と呼ばれていた。そのため現代の読者の大多数は、『エヴゲニー・オネーギン』の次の一節を正しく理解できなくなっている――

舞踏会で、はたまた帰宅時の玄関口で
黄色いショールを纏った神学生や
頭巾を被ったアカデミшянと
出くわすことなどありませんように！
Не дай мне Бог сойтись на бале
Иль при разъезде на крыльце
С семинаристом в желтой шале
Иль с академиком в чепце!

[3章28節]

ここで話題になっているのは、ロシア語文法を知悉した若くない貴婦人たちのことであり、そうした貴婦人たちが、ロシア語の廃れた諸規範の擁護者たる神学校の卒業生、あるいは神学大学の卒業生たちに喩えられているのである。

レフ・トルストイの中篇『偽クーポン Фальшивый купон』に出てくる、ギムナジウムで宗教の基礎を教える神学教師ヴヴデンスキーは、「妻に先立たれたアカデミシャンで、非常にプライドの高い男 вдовец, академик и человек очень самолюбивый」である[1部12章]。もちろん彼は現代的な意味での「アカデミシャン」などではなく、ただたんに「神学アカデミー」を卒業しただけの男に過ぎない。

教育関連術語に触れたついでに、〈官費学生 казеннокоштный студент〉と〈私費学生 своекоштный студент〉という二つの概念についても説明しておこう。大学教育は有料であったのに加え、「無産層 неимущие」(当時の表現では〈貧困層 недостаточные〉)出身のごく少数の学生だけにしか「国費 казенный счет」(古い表現では「官費 казенный кошт」)は給付されなかった。その結果、これら二種類の呼称が生まれることになったのである。

中等教育を受け持っていたのは〈ギムナジウム гимназия〉と〈実科中学校 реальное училище〉(1864年から1872年までは〈実科ギムナジウム реальная гимназия〉と呼ばれた)である。「ギムナジウム」が人文科学系の科目に主眼をおいていたとすれば、「実科中学校」は自然科学系の科目の教育を優先させていた。「実科中学校」の在學生は〈実科生 реалист〉と呼ばれた。〈短期ギムナジウム прогимназия〉と呼ばれていたのは「不完全なギムナジウム」のことで、そこは「ギムナジウム」の4年分の教育課程で卒業できた。

チェーホフの短篇『可愛い女 Душечка』のヒロイン、オーレニカは、次のような考えを開陳している——「それでも古典教育の方が実科教育よりも優れています。ギムナジウムを卒業すればどんな道へも進めますからね。博士になるも、技師になるも、お望み次第なのですから что все-таки классическое образование лучше реального, так как из гимназии всюду открыта дорога: хочешь — идти в доктора, хочешь — в инженеры」。

「6章」付録

等級 Класс	文官 Гражданский чин	武官 Военный чин	宮内官 Придворный чин	敬称 Формула титулования
01	尚書 Канцлер	元帥／総司令官 Герерал-фельдмаршал		いと気高きお方／大閣下 Высокопревосходительство (Your Highexcellency)
02	真正枢密顧問官 Действительный тайный советник	元帥 Герерал-аншеф(1796年まで) 陸軍歩兵大将 Генерал от инфантерии 陸軍騎兵大将 Генерал от кавалерии 陸軍砲兵大将 Генерал от артиллерии 陸軍工兵大将 Инженер-генерал	侍従長 Обер-камергер 執事長 Обер-гофместер 主馬首 Обер-гфмаршал	
03	枢密顧問官 Тайный советник	陸軍中将 Генерал-поручик(1798年まで) Генерал-лейтенант	調馬官 Шталмейстер 狩獵官 Егермейстер 主席女官 Статс-дама	気高きお方／閣下 Первосходительство (Your Excellency)
04	真正国政顧問官 Действительный статс-кий советник	陸軍少将 Генерал-майор	侍従 Камергер 女官 Фрейлина	
05	国政顧問官 Статский советник	准将／旅団長 Бригадир(1799年に廃止)	侍従補 Камер-юнкер	いと敬うべきお方／尊下 Высокородие (Your Highworship)
06	省顧問官 Коллежский советник	陸軍大佐 Полковник		いと誉あるお方／貴下 Высокоблагородие (Your Highhonor)
07	宮廷顧問官 Надворный советник	陸軍中佐(19世紀の親衛隊にはなし) Подполковник		
08	省陪席判事 Коллежский асессор	陸軍第1少佐 Премьер-майор(1798年まで) 陸軍第2少佐 Секунд-майор(1798年まで) 陸軍少佐 Майор Войсковой старшина(コサック軍)		
09	名義顧問官 Титулярный советник	陸軍大尉 Капитан Ротмистр(騎兵隊) Есаул(コサック軍)		誉あるお方／貴殿 Благородие (Your Honor)
10	省書記官 Коллежский секретарь	陸軍二等大尉 Штабс-капитан		
11	船舶書記官 Корабельный секретарь (18世紀中に消滅)	同上		
12	県書記官 Губерний секретарь	陸軍中尉 Поручик Сотник(コサック軍)		
13		陸軍少尉 Подпоручик Корнет(騎兵) Хорунжий(コサック軍)		
14	省登録官 Коллежский регистратор	陸軍少尉補 Прапорщик		